

教育的なるもの

三 枝 樹 正 道

『朝早く、お城へ行つた石工のリーンハルトは、今歸つて來て、彼の妻のところに居た。』

妻は、夫が歸つて來る前に、土曜日の仕事を、急いで片づけてしまつて居た。而して彼女は、子供達の髪を、梳つて結んでやり、又、子供達の着物をも、よくしらべてやり、小さな部屋も掃除して、その傍ら、子供達に、一つの歌を、教へてやつた。而して「お前達は、この歌を、お父さんに歌つてあけるのですよ」云つた。子供達は、父親が、歸つた時に、喜ばせることを想像して、喜んで憶へた。子供達は、仕事を手傳ひながら、何の苦痛もなく、怠りもせず、而も書物も無くして、母親にならつて、遂に歌をうたへる様になつた。

かくして、今父親が、歸つて來た時、喜んで迎へて、子供達は母親と一緒にそれを歌つた。

みそらよりきたりて

わづらひ、なやみ、くるしみをしづめ

かなしみ、かさなるひこを

かさなる、なぐさめをもて

みたしたまふ、なんぢ

あゝ、われは

あせり、まはるこにも

わづらはしき、くるしみにも

ほしいまゝなる、たのしみにも

ものうく、なりぬ

こゝちよき、やわらぎよ

きたれ、あゝ、きたれ、わがむねに

子供達が、母親を朗らかに、静かに、歌つて、父親を迎へたときに、リーンハルトの眼には、涙が流れてゐた。彼は心から感激して「可愛いお前達に、神様が、お恵みを、賜るように。親しきお前に、神様が、お恵みを、賜るように」を祈つた。

ゲルトールドはその時、「私達が、平和を求め、正しいことを、行つて、欲を少くすれば、此世が、天國であります」を答へた。

リーンハルトは、又「若しも私が、人生のこの天國、心の平和を、味ふならば、それはお前が、私に與へて呉れたものである。お前が、私を助けてくれたことは、私は死ぬまで、お前に感謝を捧げます。而して、この子供達は、お前が死んだ後、お前に感謝するであらう。おい、子供達よ、さうぞ、いつも正しいことを行つて、お前達のお母さんに従へよ、お前達はきつと、幸福になるであらう。」と云つた。

ゲルトールドは、そこで「あなたは、今日は、ほんとうに、まごころをこめて居て下さいます」を喜んだ。『

これはベスタロツチが、西紀一七八一年に、友人達の勧めによつて、書いた、「リーンハルトとゲルトールド」なる教育小説の一節である。

こかく教育的と云ふ言葉が冒頭にあると、何となく、堅くるしく、理窟めき、道學者的な雰圍氣が、漂ふものである。

けれども、ほんさうの教育は、決して、そんなものではない。現在一般に、理解されてゐる様な、無味乾燥なものではない。又そうあつてはならないのである。眞の教育は、實に、情味豊かな、暖みこ、濡ひのある、我他の溶け合つたものでなければならぬ。今此小説の一端を通じて眺めても、親子、夫婦が、實に、なごやかな氣分の中に生活してゐる姿が、よく現れてゐる。此母親にして、遂に、當時の腐廢墮落せる農村の惡弊を、救済し得たのである。教育は理窟ではゆかないものである。ペスタロッチは、教育者として、一面極めて生眞面目な、道學者的な、性格の持主ではあるが、その半面には、理窟を抜きにして神を慕ひ、又ゲーテの詩を引用せるを見れば、當時あの戀愛詩人の情味豊かな詩趣をも充分に味ひ得たことも、想像するに難くない。實際またペスタロッチは、妻アンナに對する熱情を見るに、決して教育を權威の異名の如く考へし、中世末の枯渴せる教育者と同じ視すべきではない。

フレーベルは、その著『人間の教育』に於て、神を信するものこそ始めて、教育しうる云ふ。自然は神の意志の表現である。従つてこの自然の研究に於て、教師と生徒は、最も親密に結合し、自然なる神の意志の表現に於て、始めて眞の教育が完成される云ふ。これは教育が、必ずしも、知識の授受を中心とせないことを物語るものである。宗教をぬきにしては、決して眞の教育の効果を齎すことは出来ない。

私は今左にトルストイの童話『教へ子』の後半を紹介して『教育的』なるものゝ、いかに綜合價値的な、宗教的なものでなければならぬかを見よう。教育が眞に社會の改善、人生の平和を、要求するならば、極めて嚴肅な、自己反省を必要とすると共に、又その反面に情操豊かな、無限の想像と、無儘の同情とを更により以上に、必要とするものである。トルストイが、あの人類愛によつて、ものした、數多き業績は實によく、この眞の教育を物語つておると思ふ。

ある貧乏人の子供が、その教父を訪ねて旅立つて行く、卒くにして教父に遭ふ。此あたりから、全くお伽噺の世界に讀者を導いてゆく、然しこの間に『教子』は人間としての罪を自覺する。そして、これを離脱せんことを悩むのである。

「さうすれば僕は世の中から、悪を絶やすことが出来るだらうか、——他人の罪を自分に着ることもなくして、而も悪を絶やすには」さ、深く悩むのである。而して教父の指示のまゝにある隠者の棲家を訪ねて旅を續けてゆく。その途中で、飼主の手を離れた仔牛が田の中で百姓達に追はれてゐるのを見る。多くの百姓達は、この一匹の仔牛を田から追ひ出さんとして、各自に周圍から勝手に追ふものだから、仔牛は逃げ場を失ふて、更に田の中を荒し廻る。そこへ、仔牛の飼主の老婆が泣き乍ら現れて、仔牛を一聲呼ぶさ、仔牛は直ぐに飼主の許へ来る。こゝで始めて、百姓達も、仔牛も、飼主も、安堵の世界に喜びを感じるのである。

「教子」はこれを見て、「悪が悪をふやすのだと云ふことがやつさ解つた、……さうしたら悪を絶やすことが出来るのだらう、さうも僕には解らない。あの仔牛は婆さんの呼び聲を聞いて戻つて来た、戻つて来たからよい、然し呼んでも来ない場合には、仔牛は百姓の手でおさへられて静かになるだらうか」さ、深く考へ乍ら歩み續ける。

それから途中で教子は、左の三つの経験をする。

その一つは、宿の主婦が食卓を幾度拭ふても、うつくしくならないので困つてゐる、それで教子は、まづ雑巾を綺麗に洗濯して、それから拭いて、さうなんさい、さ教ふ、主婦がその通りして始めて食卓の、塵の拭へたのを喜ぶ。

その二つは、幾人かの百姓達が、車の外輪に使ふ木を曲けてゐるのを見る。彼達はその木がしばつてある、臺木の抑へがゆるんでゐて、少しも支へになつてゐないのに氣づかずして、一生懸命に、木を曲げんとしてゐる、従つて、幾度やつても木は少しも曲らない。そこで教子は百姓達に、まづその臺木の抑へを固くして、その後に曲げなさいと云ふ、教へらる儘に百姓達は實行して容易く曲けることが出来た。

その三つは、曉前の野原に四五人の牛買共が、各自に牛をつないで、輪になつて焚火をしようとしてゐる所へ来た。彼等は濕つほい柴を、まだ十分に燃えあがらない枯木の上に、次からくくべ足しては火を消してゐた。教へ子はこゝ

でも亦牛買共に教へた、「お前さん達よ、そんな燃えあがらない焚火の上に、そんなに澤山も濕つほい柴をおいてはいつまでたつても、火は燃えて來ない、そんなにあせらないで、まづ枯草を澤山に、充分に燃やしておいて、その上へほつり／＼濕つほい柴をくべなさい、きつ／＼よく燃へるから」云。牛買共は辛くにして暖をさるゝことが出來た。

こんな經驗をして、四日目に、訪ねる森の隠者の庵へ來た。隠者に途中の出來事を話して、自らの悩みも打ちあけて救ひを乞ふ、隠者は總て聞き終つて靜かに立つて戸外に出て、教子に一本の樹を伐らせて、更にそれを三本／＼し、而もその先を燒いて、これらを土地に埋めさせて曰く、「これから毎日、麓の川から、口に水をふくんで來ては、これにかけて、一本の燒け杭には主婦に教へたように、二本目の燒け杭には百姓達に教へたように、三本目の燒け杭には牛買共に教へたようにして、此三本の燒杭が芽を出し葉が茂つて林檎の實になるようになったらお前の悩みは解けるだらう、それと同時に自分の罪も償ふことが出来るだらう」云。

教子は、それからは教へられしが儘に毎日々同じことを實行してゐた。一日庵を訪ねた時隠者はすでに亡き人／＼なつてゐた。村人／＼共に町重にお葬ひをして、自分は同じ生活を繰返す間に遂に澤山の村人の信を得る／＼になつて、聖者／＼して崇められる／＼になつた。いつの間にかこうして二年の月日は流れた。

ある日庵の外に馬の足音がして、頑丈な人間がそこへやつて來た。見馴れぬ人だから、誰か／＼尋ねる、云、「俺は強盜だ人を殺すことが愉快なのだ。お前は人を憐れんでおれ、俺は人を殺して生きてゆく、」云、「お前は俺に神様を説くが、俺は明日は却つて二人／＼殺してやる。もう二度／＼出しやばるな」云云ひのこして森の中へ行つてしまつた。教子はこの平和な村におそろしい者の來たことを心配して、さうか再び來ない様に神様に祈つた。幸ひにしてそれつきり強盜は現れなかつた。八年の歳月が靜かに暮れていつた。教子は然し、曾ての強盜の言葉を思ひ出して、「自分はモト隠者／＼して暮すべく命ぜられてゐたのに、人に情を賣つてゐる／＼のような生活をしてゐた」云考へ出して急ち、今までの生活が眞の

生活でなかつたこゝに氣つき、その儘更に人里離れた深林の中へ入つて行つた。

處が、そこで再びあの恐ろしい強盜に出遭つたのである。

強盜「さこへ行く」

教子「誰も訪ねて來ない處へ行く」

強盜「人が來なくなつたらさうして生きてゆく」

教子「神様がさうかして下さる」

強盜は何も言はずに立ち去らうとする。教子は今なら、この強盜も改心して呉れるだらうと思つて、「ちよつと言ひたいこゝがある。悔ひ改めなさい、お前さんも神様からは逃げるこゝは出來ない」と忠言するに、強盜は非常に怒つて二度ゆるしてやる、馬鹿奴、三度目は氣をつけろ、こん度會つたら命は無いぞ」と云つて駈つて行つた。

その晩に不思議にも一本の焼杭に芽が出てゐた。

その後、生活には何の障りもなく十年も過ぎた。焼杭はまだ二本も残つてゐる。ある朝靜かに自分の罪の深さを反省してゐるに、又も強盜の馬蹄の音が聞えた。教子は此時充分決心して、死を賭して、一切を神に任せて強盜に會つて三度諫めようとした。強盜は眞に怒りを含んで嚇かしたが、彼は少しも恐れずに敢然と向つた。強盜は何を思つたか、「もうこれからは邪魔をするな」と云つて、又も林の中へ駈け込んで行つた。翌日第二本目の焼杭に芽が出てゐた。

又も十年は経過した。教子は今は全く恐ろしいものもなく、欲しいものもなく、而も幸福そのものゝように暮してゐた。これから一つこの幸福を世の人々に説いて來ようと思へてゐるに、ふと又、強盜が近づいて來た。此度は強盜は極めて沈んだ顔つきである。教子は、説いてもわかるまいが懸念はしたが、神の慈愛、眞の幸福を、兄弟に話す如くに説いた。涙を流して説いた、最後に強盜は遂に折れて、教子の前に膝をついて、

「お翁さん、お前は勝つた。二十年間、お前さんと戦つたが遂に負けた。最初お前さんと會つた時は、反つて怒つて一層悪事をした。次に會つた時は、お前さんのあの欲をはなれた言葉を考へずにはおれなかつた。その日から毎日お前さんの食物をあそこの枝にさけておいたのは俺だつた。そして今、殺されるのさへ恐れない、お前さんを見た時、俺の心が變つたのだ」ミ深く慚愧した。

二人が靜かに焼杭の所へ行くミ、三本目にも又芽が出て小さな林檎の樹になつてゐた。

教子は今こそ自分の一生の出來事を強盜に語り聞かせ、強盜も此老人の靜かな最後を送つて、眞人間にまで育てあげられて、餘世を送つた。

これでこそ眞に人を教育しえたミ云ひうるのだらう。教育には、尙ほ他に重要な半面を有するが、此宗教的な要素を缺いてはならない。